

---

# 長雨と約束

結城菜緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

長雨と約束

### 【著者名】

結城菜緒

Z0589B

### 【あらすじ】

「また明日、公園で遊ぼうね」と約束した鈴と茜ちゃん。でも、長雨のせいで『明日』が来ない。明日は来てるのに『明日』来ない。『明日』つていつ来るのかな?

(前書き)

わかりにくいかもしれませんが、少しでも何かを感じてもらえた  
嬉しいです。

「また明日も公園で遊ぼうね。約束だよ、  
そう言つて、茜ちゃんと指切りをした。

「こつまでそいやつてガラスにくつこてるつもつへきりと今の鈴  
の顔す」ぐづサイクよ

「だつてえ」

「だつてえ、じやなこの。はやくこち来なさい。」飯冷めちゃう  
わよ

鈴は窓ガラスから離れ、手招きをする母親を少しこらみ、しぶしぶ食卓テーブルに近寄った。鈴は背伸びをしながら、テーブルの端に手を起き、しがみつきながら言つた。

「またチャーハン？」

その姿を見ながら、母親は鈴に近寄り、鈴の着ている桃色のワンピースを触りながら言つた。

「あんなことしてるから、ガラスの水滴で服が湿つてるじゃない」「いいの。ガラスのお水だからきれいだもん」

母親はやれやれと言つように肩をすくめた。

「ほら、はやく座つて食べなさい」

「だつてえ」

「だつてえ、じやなこの。また明日でこいじやない」

「また明日、また明日つて、明日はこつ来るの。今日はこつだつて  
今日なのに。明日だつて一日しかないはずでしょ？」

「それは…」

プルルルルッ

リビングの電話が鳴つた。

「茜ちゃんかな！」

そう言つて鈴はドタドタ音をたてて、ガチャッと勢によく受話器

を取つた。

「茜ちゃん？」

「鈴ちゃん? おはよう。今日も雨降りだね。また遊べないのかな。もう約束の日から六日もたつてる。さんねんだね」

「だよね。鈴も朝からそのことばかり考えてた」「ねえ、茜ちゃん。約束、覚えてる?」

「うん。また明日、公園で遊ぼうね、でしょ?」

「うん! でも、明日は来てるのに約束は果たせないの。どうしてかな」

「約束は延ばせても、明日は延ばせないしどせないからじゃないかな」

「でもお母さんは、また明日つて先に延ばすことが出来るみたいに言つてるよ」

「…」「うーん」

鈴と茜ちゃんの間に沈黙が流れた

「…どうしだらう?」

一人とも同時にそう呟いたが、お互いに自分の声しか聞こえなかつた。

でもきっと、そのおかげ。

「茜ちゃん。天氣の神様と約束すればよかつたね」「え?」

「明日、鈴と茜ちゃんが遊ぶから、太陽さんでぴっかぴかにしてね。約束だよって」

「ふふ、そうだね」

あはははは、と一人で笑いあつた。

「ねえ茜ちゃん、また明日とか忘れて、今から遊ぼうよ

「え? でも雨降りだよ」

「レインコートと傘、あと長靴をはいて」

「大丈夫かな…お母さんに聞いてみるから、少し待つていってね」

鈴がうんと返事をすると茜ちゃんが茜ちゃんの母親の所へと駆け

るトタトタとこつ音が、電話越しに鈴の耳に流れてきた。それを確認して、母親に言った。

「レインコートと傘と長靴ビリレアッたかな」

「すじませんね。こんな雨の日」

「うん、うひひめんね。それに間に合ったのはわいとわいの鈴だと思つし」

鈴と茜ちゃんの母親がそんな話をしていたのも、そんなこと関係ないよに鈴と茜ちゃんは話していた。

「あ、茜ちゃんのその長靴可愛いね」

鈴は茜ちゃんの黄色い長靴を指差して言った。

「本物? ありがと。でも鈴ちゃんの赤い長靴もすくい可愛い」

茜ちゃんに可愛いと言つてもらえた赤い長靴がなんだかとても誇らしくなったのか、鈴はその場でパシャパシャと足踏みをして、水しぶきを少しつ上げ、ブルブルと体を震わせた。

「ふうーう。わ、はやく公園に行こー」

「うそ、そうしよう。じゃあ、お母さん、鈴ちゃんのお母さん、鈴ちゃんと公園に行つてきます。暗くなる前に帰りますね」

茜ちゃんは礼儀正しく自分の母親と鈴の母親に言つながらお辞儀をした。その姿を見て鈴もぺこっと頭を下げた。

「鈴ちゃん、行こう」

茜ちゃんが傘を持つた左手とは反対の手を差し出しついた。

「うそー」

鈴もとびきりの笑顔で応え、差し出された茜ちゃんの手を握った。

「行つてきまーす」

一人で声を合わせてわいわいと、公園へと続く道をピチャピチャバシャバシャ音をたてて、仲良く歩いていった。

示し合わせたかのように、長靴と同じ色の傘を持ち、透明のレイバーの下から薄く見える桃色のワンピースと黄色の洋服。雨の

なかを笑いながら歩くその一人が心なしか輝いて見えるかのよう、母親である二人の大人は口をそろえてこう言った。

「子供は、いいわね」

お互には顔を見合わせて、少し笑った。どちらから言つわけでもなく、でもきっと昔の自分たちを思い出したのだろう。

そして、子供だからではなく、大人だからでもなく、私が、私たちが変わってしまったのだと。

「さ、じゃあ私たちも動きだすとしますか」

鈴の母親はふつきたかのように言った。

「ふふふ、そうですね」

茜ちゃんの母親も優しい笑顔を添えた。

「やつぱりさつきのウソー神様とじゃなくて茜ちゃんと約束してよかつた」

「どうして？」

「だって、茜ちゃんとだからこつして約束守れたもん」

鈴は屈託のない笑顔を茜ちゃんに向けた。

「私だから？」

茜ちゃんは不思議そうに語尾にアクセントをつけた。

「うん！ だって、相手がいるから約束が出来たんだよね。それに

」

「それに？」

「明日は何回でも来るけど、昨日の明日は今日だけだもん！」

相変わらず雨は降り続けるけれど、たかがそれだけ。カレンダーは止まっているけど、時計は止まっていない。時計は止まってないけれど、時間を繰り返しているだけ。たかがそれだけ。

じゃあ、あなたは？



(後書き)

どうでしたか?  
はじめて投稿をさせてもらったのですが、感想など何でもいいので聞  
かせてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0589b/>

---

長雨と約束

2010年10月8日15時47分発行